

氏 名	小 嶋 洋 子
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士 (美 学)
学 位 記 番 号	甲文第114号 (文部科学省への報告番号甲第407号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年3月2日
学 位 論 文 題 目	竹久夢二における感情の諸相
論 文 審 査 委 員	一さらなる夢二理解の可能性に向けて (主査) 教 授 加 藤 哲 弘 (副査) 教 授 永 田 雄次郎 岸 文 和 (同志社大学教授)

論 文 内 容 の 要 旨

竹久夢二(1884〔明治17〕～1934〔昭和9〕年)は、明治後期から大正にかけて時代の寵児となった流行画家である。「夢二式なるものは明瞭な造形的スタイルで、当時の意識を支配した」(有島生馬)とまで言われ、現在に至っても「夢二式」は多くの人に、ある種の固定観念を与えてきた。具体的に言えば、それは、切れ切れの細い線や多用される曲線によって生み出される人物や景色、さらには、それらから惹き起こされる感情についての固定したイメージであって、その結果、夢二が描く絵からは、ほとんどいつものように、そこはかとない寂しさや悲しさ、切なさといった感傷的な感情が感じられてしまうことになっている。

本論文で、提出者の小嶋洋子氏は、このような、いわゆる「夢二式」に含まれる感情だけでこの画家をとらえようとする一般的な理解に対して強い疑念を提示している。小嶋氏によれば、夢二は、他の感情もきちんと表現することによって、人間の多様で豊かな感情を表現した画家であった。氏は、夢二自身や作品に対するこのような固定化したイメージは、そのイメージにそぐわないものは夢二のものとして認識せず、夢二理解を限定してしまうことにつながるのではないかという危惧を表明するとともに、夢二の描いた感情をとらえ直すことができれば、「夢二式」の範囲に閉じ込められてしまっている夢二を新たな角度から理解することができるのではないかと主張する。

このような問題意識にもとづいて、本論文では、3部8章にわたって議論が展開される。まず第一部の3つの章で小嶋氏は、「夢二式」という概念を手がかりに、一般に夢二が表現したと受け取られている「感情」がじっさいにはどのようなものであったのかを、先行研究の検討や様々な用例の提示によって明らかにする。次に第二部では、夢二が表現した意外な感情として、「宗教的感情」が採りあげられる。第二部第一章では、夢二のキリスト教との関わりが、その生い立ちから追跡され、第二章では、1918年の「竹久夢二抒情画展覧会」に出品された作品の中で、信仰心や男女間の性愛とは異なる愛などがどのように表現されたのかが、また第三章では、雑誌『新少女』の誌上討論会や投稿画を分析することで、夢二作品の大きな受容層であった少女たちへの感情の伝播が論じられる。そして第三部では、もう一つの意外な感情として、「生き生きした感情」が採りあげられる。第三部第一章で小嶋氏は、明治期に始まる抒情詩の分析を通して、抒情画の世界では自分と対象の境界があいまいになってしまうことを指摘し、第二章では、夢二が、『新少女』における投稿画評を通じて少女たちに向けて、お仕着せのステレオタイプの感情を表現するのではなく、「ほんたうらしいもの、いきいきしたもの」を描くように指導していたことを明らかにする。

本論文では、以上の考察をもとに、結論として、夢二の作品や行動には、固定観念の枠を越えた意外な感情として、宗教的感情と「生き生きした感情」が存在することが明らかにされた。つまり、小嶋氏によれば、夢二は、「夢二式」に現れるような限定された感情、すなわち寂しさ、悲しさといった感情を表現することに終始していたのではなく、じつは、信仰心や男女間のものとは異なる愛や、その時その時の流動的な心の動きにもとづく感情を表現していたのであり、そのような感情を表現するように、夢二を支えた大衆（少女）に向けて説いていた。そのような活動の結果として夢二は人間の多様で豊かな感情を表現することができたのだということを小嶋氏は強調し、このようなとらえ方をすることで、夢二の作品に対する、さらに深い理解の可能性が広がっていくと主張している。

論文審査結果の要旨

本論文は、小嶋洋子氏が博士課程後期課程に進学して以来、さらには後期課程の単位を取得し満期退学した後、愛媛県東温市にある高島華宵大正ロマン館に学芸員として勤務してからも継続的に取り組んできた竹久夢二研究をまとめたものである。その意味で、本論文における作品分析は包括的であると同時に緻密で詳細なものになっており、結論は、これまでにない新たな解釈と新鮮な問題提起を含んでいる。

本論文において具体的に評価すべき点は、以下の3点に要約できる。

まず、本研究が、未公開ないしはこれまでにあまり触れてこられなかった資料をもとにした、事実関係の調査にもとづく高い実証性を有するものである点が挙げられる。論文では、「抒情画展覧会」の目録や『新少女』投稿画評などについての資料が紹介されるとともに、「夢二式」という語の使用例が新聞や雑誌、図書などから丹念に収集されて一覧にまとめられており、これらは、今後の夢二研究のための有益な資料となるであろう。とくに、1918年に神戸で開かれた抒情画展覧会の目録には、これまで知られていない作品の図版も含まれており、小嶋氏の主張する宗教感情の表現という観点からのみならず、当時の夢二の芸術活動一般について理解するためにも貴重なデータとなる。

第二に、この論文で評価すべき点は、本論文が、従来それほど本格的には検討されてこなかった、夢二とキリスト教との深いつながりについて主題として採りあげ、具体的な作品分析の中で明らかにしたことである。小嶋氏が指摘しているように、夢二は、確かに洗礼こそ受けてはいないものの、キリスト教、なかでもプロテスタントの信仰をつねに身近で意識していた画家であった。また、その生い立ちから学生時代、上京後に挿絵画家としての制作活動を始めてからも、夢二はいつもキリスト教関係者との深いつながりの中にいた。もちろん、この点についてはこれまでの先行研究でも頻繁に言及されていたことである。しかし、それらに対して、小嶋氏の研究は、とくに第二部第二章における展覧会の展示室ごとの作品主題の分析に見られるように、とかく抽象的な議論に流れやすい、このような宗教心の表れの問題を、夢二が描いた作品の具体的な画像分析を通じて明らかにしている。

最後になったが、本論文が、夢二を感傷的で甘い画家という紋切型の中に閉じ込めようとする、いわゆる「夢二式」の枠組みではとらえきれない、夢二における「抒情」の多様な広がりを明らかにしたことは特筆に値する。当時漸く機能しはじめていた雑誌や新聞などのメディアに載って一般大衆の間に流通していった夢二による抒情画のレパートリーが、少数の狭く固定的なイメージに限定されないという小嶋氏の主張は、夢二本人だけにではなく、夢二による作品を積極的に受容していた「少女」たちの実像に向けられたものである。夢二が宗教性と、強い主体性や活動性を要求し続けた画家として特徴づけられたように、この論文では、夢二に憧れた少女たちも甘美な感傷に耽溺するだけの存在としてではなく、多様で豊かな感情を表現する人間として扱われている。

なお、公開審査会の席上では、問題点の指摘や要望も寄せられた。最も多かったのは、感情という言葉の

概念規定についてのものである。小嶋氏がこの語を使用するとき、それは、作者の夢二が心中に抱いた感情であるのか受容者が自ら感じた感情であるのか、それとも、画中に描かれた人物が表現している感情なのか？さらにいえば、人物以外の画中のモチーフや画面全体の雰囲気醸し出してくる感情というものも存在する。これらについては十分な整理をしたうえで、感情という語の使用に当たっては慎重な姿勢をとることが望まれる。また、夢二の宗教心が、小嶋氏の主張するように、美的な疑似宗教感情からほんとうに区別されたものであるのかどうかという点についても、説得力不足の感は否定できない。受洗の有無などの事実関係を論じるだけではなく、むしろ、夢二が描き出した画像の造形面や主題面でのテキスト構造や、それが当時のコンテキストの中で果たした具体的な機能に密着することで、さらに論証を進めることが有効な方法であろう。この他、感情と深いつながりをもつ可能性のある、夢二と音楽（楽譜）との関係などについても、さらなる考察が望まれる。また、小嶋氏が強調する、「別の感情」が、彼が深く関わっていたドイツ表現主義や、当時活発化していた自由画教育運動との共通点を持つものだとすると、それはそれほど「意外」なものではないとも考えられる。

いずれにせよ、これらは、本論文が現時点で内包する限界であり、その克服は、今後、小嶋氏が研究者として自立していくうえで取り組まなければならない課題となるであろう。しかし、これらの問題点を勘案しても、本論文は博士論文としての条件を十分に満たしている。本論文審査委員3名は、論文の審査ならびに2012年2月15日に実施された論文発表とそれに続く公開審査会での口頭試問の結果により、小嶋洋子氏が本論文によって博士（美学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告する。